



林喜右衛門家  
創始四百年記念  
林能楽会定期公演

SHITE

シテ。

2025

別会

能 観世流

2025年

5月17日(土)

13:00開演 (12:00開場)

きよつね

「清経 恋之音取」 河村 浩太郎

どうじょうじ

「道成寺」 樹下 千慧

京都観世会館

全席指定

一般

SS席(正面中央)	15,000円	B席(中正面)	8,000円
S席(正面脇)	12,000円	C席(2階前列)	8,000円
A席(脇正面)	10,000円	D席(2階後列)	3,000円



電話予約 075-751-8158 (平日10:00-17:00)

主催 林能楽会/株式会社唐紅





京都の地で観世流能楽を  
 生業としてきた林喜右衛門家は、  
 二〇二五年、四百年周年を迎えます。



別会 五月十七日(土) 午後一時開演(十二時開場)

### 清経

能  
 宮本 茂樹  
 河村浩太郎  
 小林 努  
 大鼓 河村 大  
 小鼓 大倉源次郎  
 笛 竹市 学  
 恋之音取  
 味方 玄  
 林喜右衛門  
 河村 晴道  
 河村 和貴  
 松野 浩行  
 吉浪 壽晃  
 味方 典子  
 河村 晴久  
 河村 晴久  
 味方 團

### 柑子

狂言  
 太郎冠者 茂山あきら  
 主人 茂山 宗彦  
 井口 竜也  
 解説 林喜右衛門 田茂井廣道

実盛 林喜右衛門  
 花筐 浦田 保浩  
 鶉之段 杉浦 豊彦

### 道成寺

能  
 樹下 千慧  
 宝生 欣哉  
 宝生 尚哉  
 宝生 朝哉  
 大鼓 河村凜太郎  
 小鼓 吉阪 一郎  
 太鼓 前川 光長  
 篠 杉 信太郎  
 河村浩太郎  
 林喜右衛門  
 味方 慧  
 大江 広祐  
 宮本 茂樹  
 河村 晴道  
 吉浪 壽晃  
 味方 團  
 橋本 光史  
 浦田 保浩  
 味方 玄  
 田茂井廣道  
 河村 和貴  
 松野 浩行  
 橋本 忠樹  
 深野 貴彦  
 河村 和貴  
 橋本 忠樹  
 茂山 逸平  
 茂山千之丞

附祝言  
 終了予定時刻 午後五時半過ぎ



### 別会公演料金

※チケット料金が改定されています。購入の際はお気をつけください。

SS(正面中央)	S(正面脇)	A(脇正面)	B(中正面)	C(2F前列)	D(2F後列)
¥15,000	¥12,000	¥10,000	¥8,000	¥8,000	¥3,000

\*当日券の有無はホームページよりご確認ください。  
 (林宗一郎 HP <https://hayashi-soichiro.jp/>)  
 \*上演中の撮影・録音・録画は禁止です。携帯電話、音の鳴る機器はマナーモードにするようお願いいたします。  
 \*他のお客様の観能の妨げとなると判断した場合は、退席をお願いする場合がございます。  
 \*チケット購入後のキャンセルは一切できません。

### 座席指定ができる「京都能チケ」でご予約



- QRコードから SHITE シテ 公演ページへ(林宗一郎 HP)。
  - 「チケットのご予約はこちらから」より「京都能チケ」へ。
  - お席を選んで PayPal 決済で購入完了! (初回のみ PayPal アカウント登録必要)
  - 公演当日、自動返信メールを会場でお見せください。
- \*座席選択後、30分以上経ってから決済されますと、座席がキャンセルされた状態で決済されてしまいます。その場合の返金はしかねます事ご承知おきください。  
 \*Gmail を使用してご予約されると自動返信メールが届きません。その際はペイパルの決済完了メールをお見せください。
- ネット予約は公演前日 5月16日 21時まで!

チケット WEB予約  
 座席指定  
 PayPal 決済  
 チケットレス

### 電話でのお問合せ、ご予約 (座席指定不可)

075-751-8158 林能楽会 /月~金 10:00-17:00

お振込み先はこちら お振込は 5月9日(金)まで

京都信用金庫 下鴨支店 (064)  
 普通 3014170 株式会社 唐紅

三菱 UFJ 銀行 聖護院支店 (445)  
 普通 0197058 株式会社 唐紅

SHITE 2025 公演予定  
 九月公演：9月6日  
 十二月納会：12月6日

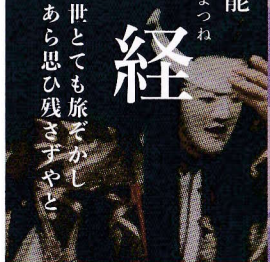


# 解説

観世流能

## 清経

この世とても旅ぞかし  
あら思ひ残さずやど



登場人物

- ツレ 清経の妻
- ワキ 淡津三郎  
(清経の家来)
- シテ 平清経の霊

### 二番目物 世阿弥作

平重盛の三男で笛の名手でもあった清経は、源氏に追われる戦の途中、九州の柳が浦で入水します。明け方、船の舳先に立つて横笛を澄みやかに吹き、今様を朗詠すると、西に傾く月に西方浄土へ私も連れて行ってほしいと「南無阿弥陀仏弥陀如来」と唱え水底へと沈んだのです。

能「清経」は、栗津三郎が妻の元へ清経の遺髪を届けることから物語が始まります。何故、妻との約束を違えて自害したのか、何故、戦の途中で自ら死を選んだのか、妻は悲しみと共に亡夫をなげります。溢れる想いに栗津がもたらした遺髪さえ突き返した妻。涙ながらに寝入ったその夜、夢に清経が現れるのです。

清経と妻の、相容れない価値観の相違、愛するが故の悲劇を『平家物語』の「無常観」の中に、抒情的に描いた世阿弥の名作「清経」。根強い人気を誇る清経の物語です。

平清経：清盛の孫。左近衛中将であったので妻からは「中将殿」と呼ばれる。清盛亡き後、平家は都を落ち西国へ逃れる。転戦するさなか、清経はひとり筑紫の海に漕ぎ出でて入水してしまう。

### 舞台経過

#### 淡津三郎が清経の形見を持って都の妻もとへ

平清経の家来・淡津三郎が登場する。清経が西国で入水した知らせと、残された清経の形見・黒髪を持ち、源平の戦の続くさなか、忍び忍びに都・清経の妻のもとへやってきたのだ。

淡津三郎は都・清経の屋敷につき、案内を請う。

【次第】(次第・名ノリ・道行・着ゼリフ)

#### 妻は都で清経の無事を祈り待っている

##### 三郎は報告する

清経の妻は夫の無事を祈り、信じ、耐え難きを耐えて、都でひとり待っている。門に淡津三郎、「早くこちらへ」、淡津三郎は妻の前にかしこまる。妻が何用かと尋ねる。「面目もない使いでございませぬ」。「もしや遁世(出家)でもなされたか」「この間の筑紫の戦もご無事であったと聞いているが」。淡津三郎はついに重たい口を開く。妻は驚き絶望し、「討たれたなら、また病に倒れたらというならばあきらめもつくけれど、自ら身を投げるとは」と、妻は夫の「裏切り」に恨み言をつらねる。

〈問答・下歌「何事も」・上歌「この程は」〉



#### 妻は形見である夫の黒髪を手向け返す 夢枕に清経が現れる

涙に暮れる妻に、淡津三郎は清経の形見の鬢の髪を手渡す。妻は見るほどに心苦しく、思いがまさり辛くなる形見を、一首の歌と共に手向け返す(気持ちの中で、形見を受け取らず夫につき返したのである)。妻の歌、

見る度に心づくしのかみなればうさにぞ返す本の社に

夢になりとも逢いたいものと涙ながら眠る妻。いつしか淡津三郎は退出し、妻の夢枕に平清経が現れる。

〈下歌「手向け返して」(恋之音取)〉

#### 夫婦は互いに「命を捨てた」「形見を返した」と責める

まずは喜ぶ妻。しかし「いつまでも添いとげると契りを交したのに、入水は約束破りだ」と夫を責める。夫は形見を返したことを責める。

〈問答・上歌「怨みをさへに」〉

#### 清経は妻に入水までの経緯を語る

清経は入水に至った経緯を語り始める。

〈サシ〉

宇佐八幡(戦の神)のお告げをうけ、さては仏神三宝も平家をお捨てになつたかと絶望し、ひとり舟で漕ぎ出た海より落ちて沈んだのだ。

〈クセ〉

#### 清経は修羅道の有様を見せ 妻に別れを告げ消えていく

妻は「契り(あなたとの関係そのもの)が恨めしい」と嘆くが、清経は「もう言うな」と断じる。その後、修羅道に落ちたのだが入水の際に唱えた十念(念仏)のおかげで仏果を得る(成仏する)ことができたといひ、夫は妻の前から消えてゆく。

〈キリ〉



うんちく

妻の歌には掛け言葉が三つある。

見る度に心づくしのかみなれば

うさにぞ返す本の社に

心尽くしと 筑紫

髪と 神

憂さと 宇佐

「髪」を軸に、心尽くしの髪だからこそ物愛さがまざる意と、筑紫の神・宇佐に手向け返そうという意が、うまく言い尽くされている。

# 道成寺

思へばこの鐘恨めしやとて

### 登場人物

- ワキ 道成寺の住僧
- ワキツレ 従僧(二人)
- アイ 能力(二人)
- 前シテ 白拍子の女
- 後シテ 蛇体

### 四、五番目物 作者不明

能「道成寺」は、安珍清姫の物語の後日譚。春の吉日、退転していた釣鐘が再興される日。決して女人を入れてはならぬ、と言われていたのに、寺男は鐘の供養を願う白拍子を寺に入れてしまいます。白拍子こそ清姫の執心。夕暮れの鐘に桜が散る中、白拍子は乱拍子を踏み舞を舞います。隙を見て鐘に近づき、鐘を落として中に入ってしまう清姫の執心。寺の僧たちが祈ると、鐘の中から蛇体と化した姿で現れます。最後は祈り伏せられ、川に飛び込んで消えていきます。

※なお、能では「安珍」「清姫」の名は一切語られません。

### 安珍清姫鐘巻縁起のお話とは。

昔むかし。

熊野詣をする山伏、安珍が紀州でいつも泊めてもらう真砂莊司の家には、娘の清姫がいました。

莊司は清姫に「あの山伏がお前の夫だぞ」と戯れに話していたところ、娘はすっかり信じてしまいます。

ある日、清姫はどうとう想いに耐え切れず山伏に言い寄ります。びっくりしたのは安珍、逃げだすと道成寺の鐘にかまってみらいます。

娘は想いのあまり大蛇となって追いかけて、寺に到ると降ろされた鐘を見つめます。中を怪しみ蛇体でまといつくと、怒みの熱で鐘を溶かし山伏を焼き殺してしまいました。

やがて蛇体も日高川に身を投げ、空しくなつたと言われています。

### 舞台経過

道成寺の住僧が登場、鐘供養のよし、また女人禁制のよしを告げる。能力(寺男)に触れさせる。

【名ノリ笛】(名宣)〈フレ〉

そこに一人の白拍子の女が、ただならぬ気配を漂わせながら現れる。道成寺の鐘供養に向かう。【習ノ次第】(次第・名ノリ・道行)

日高の寺(道成寺)に着き、中に入ろうとすると能力に止められる。供養に舞を舞いたいと言われ、能力は舞の見まさか、言いつけを破り白拍子を勝手に通してしまう。白拍子は烏帽子を着け、舞う準備をする。

〈着セリフ・問答〉(物著)

静かに、意味深に、鐘を見込むと白拍子は舞い始める。

【次第】(乱拍子)



白拍子は謡い込みながら、さらに舞い続ける。すると突如、空気が一変する。今までの静寂を破り、激しく舞を舞う。【ワカ】(急之舞)

人々が舞にうっとりし眠った隙に、白拍子は鐘を呪い落としてしまう。鐘は白拍子を飲みこむ。【ノリ地】(鐘入り)

能力は大きな音に驚く。落ちたことをなんとか報告、住僧は鐘を見、昔の伝説(安珍清姫の物語)を語る。【語り】

伝説の女の執心とさつた僧たちは、鐘に向かい祈る。【ノット】(ノリ地)

すると鐘の中から蛇体と化した女の執心が現れる。僧との抗争。【祈り】

抵抗していたが最後は祈り伏せられ、蛇体は鐘に思いを残しつつ、日高川に飛び入る。僧たちは寺の本坊に帰るのだった。【キリ】

ワキ・ワキツレが退くと、作法に従い鐘が入り、各役が退いて、能《道成寺》は終演。



### 能《道成寺》の見どころ

#### 「乱拍子」

二十数分間、ほとんど動かず、独特の足使いで舞う舞。シテと小鼓との一騎打ちの中で舞っていく。キーワードは「ウロコ」。鱗形すなわち「三角形」に動く。

途中、鐘を見込む場面がある。まるで鐘は恋しい男と自分を隔てた憎い存在だというように。

また乱拍子は、着ている唐織を左手でつまんだまま舞うが、いったん離すとそれが合図となり、中ノ段になる。

そして舞の中にいわゆる「乱拍子語」を語り込んでゆく。道成卿が道成寺を建立したことを途切れ途切れに謡う。ついには堰を切ったように「急之舞」へと続いてゆく。

#### 「鐘入り」

前場のクライマックスで、文字通り、シテが鐘の中に入る。白拍子は鐘を見込み、烏帽子を打ち落として駆け寄ると、鐘を落として中に消えてしまう。

#### 「柱巻き」

柱に蛇体がトグロを巻いている表現。シテがシテ柱に巻きつく。

#### 白拍子とは

むかし流行った芸能の一つ。またその白拍子を舞う人も「白拍子」と呼ばれた。女性が男装をして歌い舞いする、という。実際は烏帽子を着、「水干」を着るらしいが、能では唐織壺折姿に前折烏帽子で表現する。